二〇二二年一二月二三日

人影に居向き変へたる浮寝鴨　なつき
突風に冬帽飛んで田を駆けり　千鶴
拗ねし子がこちら向くまで毛糸編む　ひのと
愛犬も家に入れたる寒さかな　澄子
双葉出づ畝まつすぐに春を待つ　あひる
討ち入りの日や南座の陣太鼓　もとこ

二〇二二年一二月二二日

湯豆腐のをどってをりぬ鍋の底　豊実
立ち退かぬ古家一軒寒灯下　ひのと
銭湯の脱衣所ゆずの香のこぼれ　千鶴
代々の遺影の並ぶ冬座敷　みきお
実千両色なき庭を明るくす　満天

二〇二二年一二月二一日

外套を預け老舗の客となる　ひのと
もの捨つる事に始まる年用意　澄子
蜜蝋を点し養蜂家の聖夜　うつぎ
祈る手に燭の火影や聖誕祭　むべ

二〇二二年一二月二〇日

凍星を閉ぢ込めてゐる観覧車　ひのと
湯上がりのタオルに柚子の香の残る　きよえ
風花のわがてのひらにとどまらず　かえる
人波に揉まれアメ横年の市　智恵子
六甲颪南京町を駈けぬけり　たか子
六甲の稜線しるく冬の晴　こすもす
目の慣れて燭のごとくに枯木星　むべ

二〇二二年一二月一九日

鰭酒を飲み干してより武勇伝　ひのと
人気なき路地を抜ければ街師走　たか子
一夜にして雪世界なる我が狭庭　明日香
着ぶくれて七人掛けが六人に　ぽんこ
堂守の話好きなり年の暮　なつき
部屋内に籠もるひと日や外は雪　千鶴
蹲の小枝で突付く初氷　うつぎ
煤払い玻璃戸に息を子と競ひ　ふさこ
立ち食いの解放感や街師走　たか子
托鉢の僧門前に年の市　なつき

二〇二二年一二月一八日

息詰めて第九のタクト待ちにけり　よう子
無精髭剃り退院す冬の晴　せいじ
寒風に指宥めつつ松を揉む　うつぎ
雪片の涙とどめし寒牡丹　素秀

二〇二二年一二月一七日

熱の子の瞳の中に雪降れり　ひのと
ぴかぴかに磨きし窓に冬日燦　かえる
禁猟区知つてゐるやに浮寝鳥　こすもす
冬日受く背なぽかぽかと畑仕事　千鶴
試歩の距離すこし延ばしぬ冬日和　たか子
病室の四人四様年の暮　せいじ

毎日句会みのる選・二〇二二年一二月二六日